

編集後記

今年は例年にくらべて冬の到来が早いとの予報であるが、秋風に色づいた木葉が舞いおちるころが、例年「木簡研究」編集の迫込みのころである。早いもので、この第三号も何とか師走の総会までには間に合いそうである。まず執筆者をはじめ御協力いただいた方々にお礼を申し上げたい。

本誌も第三号になって、ようやくそれなりの「顔」ができあがってきたかようである。一度「顔」ができてしまうと、抜本的に改めることはむずかしく、かといってマンネリに墮すおそれもあり、少しずつ内容にあうような「整形」を施していかなければならぬ。その点では、本号についていえば、図版積文には法量を記入したこともそうした改善の一つである。また図版積文と本文中の積文との異同が指摘されているが、これは編集子の不注意による部分もあるが、一つには印刷の工程のちがいが、校正の最終段階で結論を変更した場合におこることがあるわけである。史料集としての性格をも与えられているため、積文はできる限りの正確さを期している心算であるが、時間的制約もあり、なかなか理想通りにはいかない。昨年の研究集会で論議された木簡の形式分類や積文の表記法についても幹事会などでは論じられることが度々ではあるが、まだ確たるところまでは行きかねているのが現状で、この点でも近い将来

に「整形手術」が必要であらう。

また編集に携って感じることの一つは、当該年の出土木簡を完全に収載することのむずかしさである。本号でも「一九八〇年出土の木簡」のうちに、八〇年以前のものを若干含んでいる。このような事態がでてくるのは、新年度当初に編集部で前年に当該地で木簡が出土したことがキャッチできず、したがって一年おくれて執筆をお願いするといった具合だからである。今後このような事態をさけるためには、何としても全国の木簡出土の情報を集中できる体制を本学会としてつくりあげなければならないのではあるまいか。これらはいずれも会員諸氏の積極的な御協力なくしては不可能であり、是非御意見をおよせいただきたい。

さて本号には前号までと同様、前半部分には出土木簡情報を載せることができた。七七年以前については六四年度分までを載せた。ただし、下曾我遺跡については都合により次号にまわすこととした。後半の論考部分では、昨年の研究集会での御報告を中心に、池田・志田原・原の三氏から、狩野氏からは氏の年来のテーマについて労作をおよせいただいた。これらの諸論考についての積極的な論争を期待したい。今後は木簡の出土情報や論考の他にも、書評・論文評や木簡関係文献目録なども載せ、より一層「木簡研究」の誌面を充実させていきたい。御協力をお願いする。

(佐藤宗導)